

咲子さんちょっと三匹の侍七人の孫青春とはなんだ若者たちおはなはん銭形平次ス
バイ大作戦意地悪ばあさん肝っ玉かあさんサインはV時間ですよ大岡越前仮面ライ
ダーありがとう太陽にほえろ！木枯らし紋次郎子連れ狼傷だらけの天使どてらい男
寺内貫太郎一家俺たちの旅岸辺のアルバム西遊記熱中時代3年B組金八先生池中玄
太80キロ北の国からふぞろいの林檎たちおしん金曜日の妻たちへうちの子にかぎ
って不良少女と呼ばれて山河燃ゆくれない族の反乱スチュワーデス物語毎度おさわ
がせしますあぶない刑事男女7人夏物語教師びんびん物語ニューヨーク恋物語愛し
あってるかい!!やっぱり猫が好き世にも奇妙な物語渡る世間は鬼ばかり101回目の
プロポーズ東京ラブストーリー愛という名のもとにずっとあなたが好きだったあすな
ろ白書高校教師ひとつ屋根の下若者のすべて妹よ29歳のクリスマス警部補 古畑任
三郎春よ、来い家なき子星の金貨未成年愛していると言ってくれロングバケーション
ふたりっ子ラブジェネレーションビーチボーイズショムニGTO週末婚お水の花道や
まとなでしこ池袋ウエストゲートパークビューティフルライフHERO救命病棟24
時真珠夫人Dr.コトー診療所GOOD LUCKムコ殿冬のソナタ熟年離婚ごくせん

テレビドラマの
タイトルは、
どのような社会を
映してきたのだろう？

はじめまして。

KOTOBAOLOGY

ことばオロジーです。

社会は「ことば」で、できている。
「ことば」が社会を動かしている。

世の中で話題になったり、人の心を動かしたり、
社会を活気づけたりしたいろんな事柄。
すべてを、あえて同じ時代の「ことば」として同じ場で眺め直した時、
そこから何が見えてくるだろう？

「ことばの考現学」そんな試みを「ことばオロジー」と呼んでみたい。
「ことば」をあくまで「ことば」そのものとして、ジャンルやカテゴリーなど既成の縛りに囚われず
時間の流れに沿って眺めてみることで、社会の動きを捉えられるのではないか。

その「ことば」が現れたのはどんな時代？
その「ことば」と他の「ことば」とのつながりは？
社会の変化と「ことば」の変化の間に関係はある？

そのように、「ことば」と「ことば」を出会わせ、つなぎ、時代と呼応させていくことで、
私たちが日々暮らす、ことばでかたち作られた社会＝「ことば社会」の姿が、
ストーリーとして見えてくるのではないか？

「ことば」にはもっと力と可能性があるはず。それをもっと見出していきたい。
「ことば」から発想する楽しさを、もっと広げていきたい。

THEME 1

テレビドラマの タイトル

テレビドラマのタイトル、と聞いて、思い浮かぶものは何ですか？
幼少期に、夢見るきっかけを与えてくれたドラマでしょうか。
大人になってから、のめり込んで見たドラマでしょうか。

テレビドラマはその時代時代の社会を色濃く映すもの。
だから自ずと、そのタイトルにも当時の状況やムードが
凝縮したかたちで表現されているはずです。

考えてみれば、
かつてドラマの王道だった、家族のドタバタ劇を描いたホームドラマを
最近見かけなくなったと思いませんか？
“ヒーローもの”は悉く“戦隊モノ”へと様変わりしていたり、
恋愛の要素を含まない青春ドラマ、と聞いても
若い人はピンと来ないかもしれません。

ホームドラマ、ヒーローもの、青春ドラマが
かつてに比べると、いま、ジャンルとして捉えにくいのはなぜでしょう。
ドラマの主役であったはずの家族やヒーローや若者は
どこへ行ったのでしょうか。

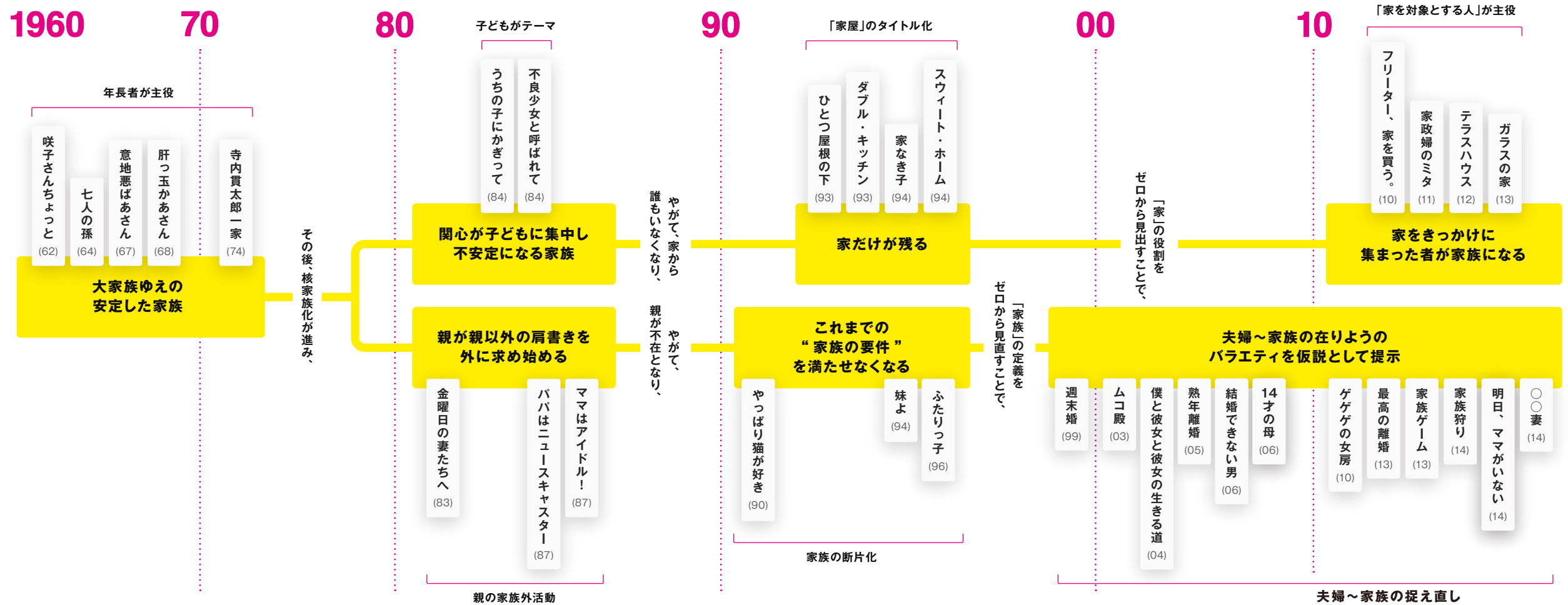
そこで、1960年代～現在に至るまでのテレビドラマのタイトルを
家族、ヒーロー、若者というテーマに絞って
それぞれ並べ、「ことば」として眺め直してみることで、
そこに浮かび上がる社会の変化を捉えようと試みました。



いま、 「家族」が増えている。

VIEWPOINT

「同じ家に住む親子兄弟」——辞書を引くと「家族」はこう定義されています。つまり同居と血縁、これが家族の基本型。ところが、テレビドラマのタイトルを眺めるうちに、この定義には収まらない“家族”があちこちに見えてきました。いまや、家族の基本型を自分たちなりにアレンジし、認め合う時代。今こそ、「家族」がいちばん楽しい時かもしれません。



1960年代～1970年代

1980年代～1990年代前半

2000年代～2010年代

一家の大黒柱がホームドラマの主役。

この頃は、『かあさん』、『ばあさん』、『寺内貫太郎』と、年長者の呼称や家長の名前がタイトルでした。家族とは、同居と血縁で規定されるものであり、大家族が一般的。家族の誰かが入れ替わり立ち替わり持ち込んでくる問題を、家族みなで衝突しながらも、最後には年長者の経験や知恵によって解決する。そんな起承転結が当たり前に成立する時代だったようです。

核家族化が進み家族の関心が子どもに集中。

ところが80年代、父母子どもふたりの核家族化が進んだことで、ふたつの変化がありました。ひとつは、家族の関心が子どもに集中したこと。大家族にはトラブルメーカーや干渉者が何人もいましたが、核家族では常に子どもが主役。したがって、ひとたび子どもに何かが起こると、道標となるような年長者もいないため、すぐさま『うちの子にかぎって』と、家族全体が揺らぐようになりました。

家では365日“親”。親以外の肩書きは家の外で得る。

そしてもうひとつの変化は、多様だった家族内の関係が固定化したこと。大家族では、たとえば「母」とときに「義娘」「姉」…と、いくつもの役割を持っていました。ところが、子ども中心の核家族では、親は家にいる限り常に「親」。異なる役割を得るためには、『アイドル』や『ニュースキャスター』というように、家の外にそれを求めるしかなかったのかもしれない。

『スイート・ホーム』だけが残り、家族と呼べるのは『やっぱり猫』だけ。

家から家族が外へ出ていくと、そこに残されたように、『屋根』や『キッチン』といった家屋が強調されるタイトルが並び始めました。また、『ひとつ』や『ダブル』など、散り散りになっていく家族を“まとまり”として数えたいという願望も見えるかのようです。次第に、家族は“家族の要件”を満たせなくなっていき、やがて関心は『猫』や『妹』との1対1の関係に移っていきました。

『14才の母』も『最高の離婚』もどちらも“家族”の可能性。

同居と血縁という家族の要件が成立しなくなり、家族が断片化された00年代以降に目立つのは、『週末婚』、『明日、ママがいない』といった、夫婦や家族のこれまでの常識を覆すようなタイトルです。平日一緒に暮らす、明日ママがいる…といった、これまでの家族の「当たり前」を再考することで、さまざまな家族のかたちの仮説を提示・試行し始めている様子が見ええます。

家をきっかけに集まった者たちで、もういちど“家族”が始まる。

家族観とともに、家の役割も変化しています。家族だから同じ家に暮らす、という発想ではなく、同じ家に集まった人たちで家族になっていく、という考え方。『テラスハウス』はオープンで、誰でも入ることができ、誰でも見ることができる家へと変化しました。家は崩れゆく家族を隠すものではなく、家族を再開するための新しい舞台となっているようです。

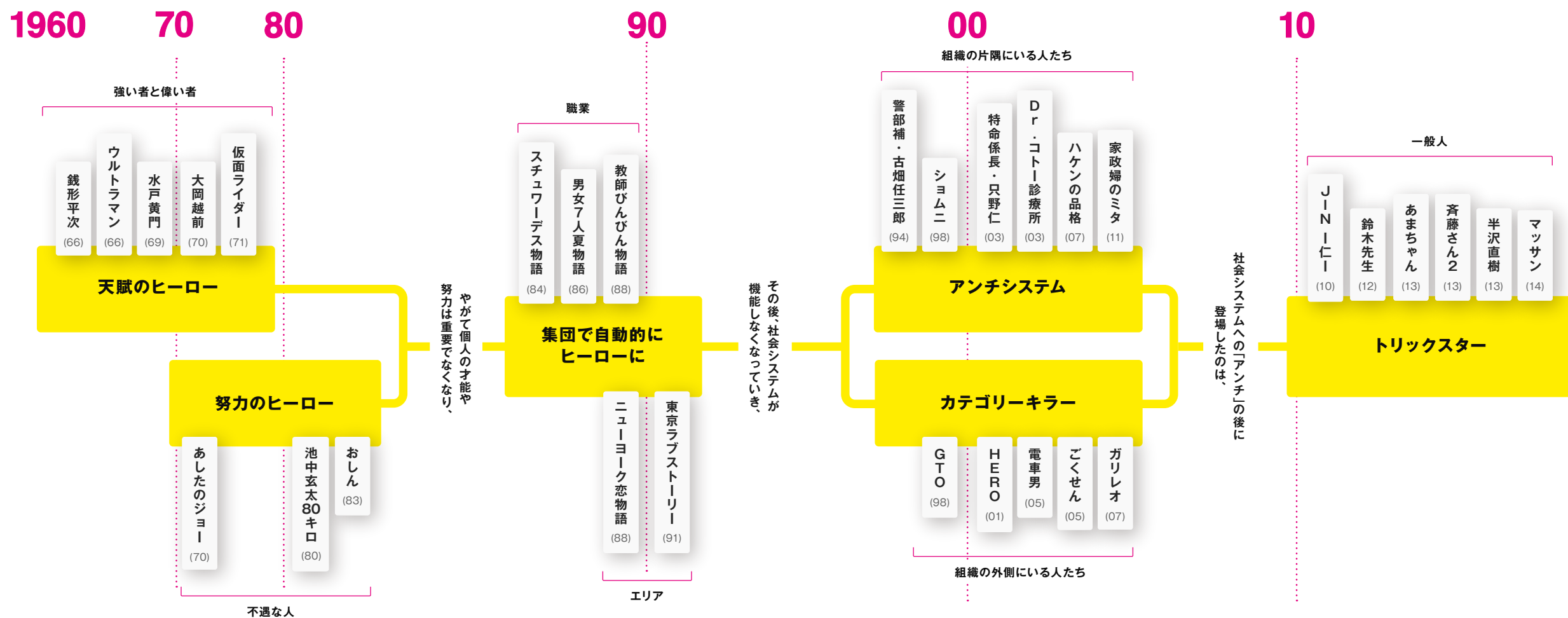
「ヒーロー」はいま、最後の切り札ではなく最初の引き金。

VIEWPOINT

ヒーロー登場の条件は、敵がいること。『水戸黄門』の敵は「悪事」、『おしん』の敵は「不遇」でした。

ところがいまは、何が「悪事」で、何が「不遇」なのかははっきりしない時代。人によって、立場によっても見方は変わります。

明確な敵を見つけにくいこの時代に、ヒーローはどう成立するのでしょうか。ヒーローに託された使命の変遷を追いかけてみました。



1960年代～1970年代

1980年代～1990年代前半

1995年後～2000年代

2000年代～2010年代

天賦のヒーローに憧れ、努力のヒーローに自己投影。

この時代のヒーローといえば『水戸黄門』や『ウルトラマン』。難題をラスト3分で一気に解決してくれる「天賦のヒーロー」、常人にはない才の持ち主です。それと同時に、不遇な環境に屈さない『あしたのジョー』や『おしん』のような「努力のヒーロー」も人気でした。不器用ながら精いっぱい生きる姿は、多くの人が「自分も頑張ろう」と自己投影をする対象だったのではないのでしょうか。

『スチュワーズ』になれば、『東京』に行けばみなヒーロー。

ところが80年代半ばになると、際立った個人のヒーローが見当たらなくなります。『スチュワーズ』、『ニューヨーク』、『東京』…。ステイタスのある職業に就き、ブランドのあるエリアで暮らす人たちが全員が「成功」を享受し、ヒーロー「気分」を味わえた時代だったのでしょうか。

集団で自動的にヒーローになれる社会システムが機能。

また、『物語』で終わるタイトルが多いのは、こういった成功者たちのサクセスストーリーが社会の関心事だったからかもしれません。80年代半ば～90年代前半は、多くの人が成功を享受できる「社会システム」が機能していた時代ともいえそうです。しかし、それは裏を返せば、システムが人からヒーローの座を奪い去った時代ともいえるのではないのでしょうか。

アンチシステム＝型破りな『警部補』が颯爽と登場。

集団で自動的にヒーローになれる、という魔法が効力を失い始めた90年代半ば以降、再び個人のヒーローが登場します。ここで脚光を浴びたのは、『警部補』、『特命係長』、『ショムニ』、『ハケン』といった企業組織の片隅にいる人たち。彼・彼女が肩書きを超えて働く姿そのものが「肩書きの無効化」＝「社会システムの機能不全」を象徴しています。いわば「アンチシステム」としての存在です。

カテゴリーキラー＝規格外の『電車男』こそ、実はヒーロー。

そして、同時期に登場したのが、『電車男』に『ごくせん』、自ら『GREAT』と冠する先生や、そのものずばり『HERO』と名乗るような、既存社会の規格では測れない人たち。これまでに異なる行動原理を持ち込む「カテゴリーキラー」が、もうひとつのヒーローの姿でした。内からアンチシステム、外からカテゴリーキラー。彼ら・彼女らは、機能しない社会システムの破壊を託されたヒーローといえるでしょう。

ラスト3分ではなく、開始3分で気づきを与えるトリックスター。

2010年頃から、『斉藤さん』、『あまちゃん』といった個人名のタイトルが目立ち始めます。明確な敵が設定できなくなった時代のヒーローとは、ひとりの人間としてリアルで率直な「問い」を発し、見過ごしがちな日常への気づきを促す、そんな人なのかもしれません。特別ではなく「正しく普通」であること、それが今もっとも難しいことであり、ゆえにヒーローたれる、ということでしょうか。

テレビドラマのタイトルは、
どのような社会を
映してきたのだろうか？

1960年代以降の紆余曲折を経ていま、 既成概念のリセットを試みる 社会が見えてきた。

家族を形づくる 「場所」と「人」の 定義をリセット。

家族 は、いつの時代も社会の大きな関心事です。
1960～70年代の高度成長期、家族には、社会に必要な労働力と消費力を担うというはっきりとした役割がありました。同居と血縁という「場所」と「人」の常識が機能し、家族が家族として成長・成熟していく“理想型”が社会で共有できていた時代です。しかし、80年代～90年代にかけて、その常識や理想が呪縛となり、徐々にほころびが生じるようになりました。
00年代以降、家族の自由度が増したのは、「運命を共にすると互いに認識している人同士」が家族である、とその定義がリセットされたからではないでしょうか。そう考えることによって、家族を規定してきた「場所」と「人」は、定義ではなく“可能性”になりました。
同居してもしなくても、血縁があってもなくても、人数が固定していなくてもよし。これまでの家族とは、暮らす場所も関係も異なった家族が、ますます増えていくのかもしれない。

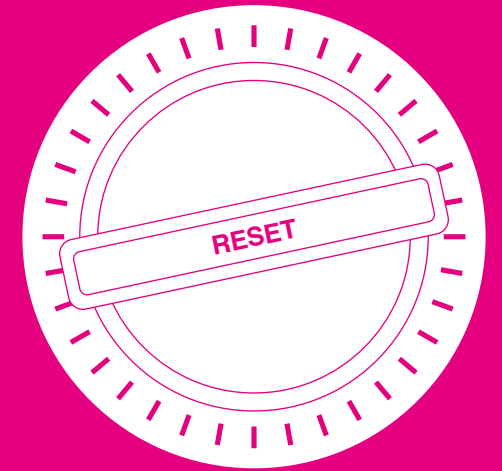
トリックスターは、 私たち一人ひとりの固定観念を リセットする異分子。

ヒーロー は、まさに社会の「憧れ」の象徴。その時代の社会にとって「何が敵で、その敵をどうやっつけるのか」というシンプルな構造が、ヒーローには埋め込まれています。
そう考えると、1960年～2000年代までは、バリエーションはあれど、常に私たちの“外側”に共通の敵がいる時代でした。だからこそ、ヒーローが最後の切り札として、痛快に敵をやっつけてくれることが期待されていました。
しかし今、どうやら敵は自分の“内側”にいます。自分の固定観念こそが自身を苦しめていたり、葛藤を抱えながら流れに身を任せていたり…。
外側に共通の敵がいらない、ということは、言い換えれば自分の見方ひとつで、敵だと思っていたものが味方になるかもしれないということです。そのことに多くの人が気づいているからこそ、“外側”の敵を倒すヒーローではなく、“内側”の敵＝“自分自身のものの見方・考え方”をリセットしてくれるようなヒーローに期待が寄せられているのではないのでしょうか。

「若者とは何か？」から 「大人とは何か？」へ 問いを逆転させてリセット。

若者 ということばが社会に登場して以来、「若者とは何か？」という問いが繰り返されてきました。やがて若者は社会の標準となり、誰もが「若者」として生きざるを得ない大人不在の社会が訪れました。
この間ずっと、「大人とは何か？」という問いは不問に付されてきました。大人が定義されなければ若者が何者かも定まらないのに、です。
おそらく、60年代以降長らく、「大人」とは議論の対象たり得ない、所与の概念だったのでしょう。そういえば「社会人」という独特なことばもありますね。安定的な社会システムに従属することが「大人になる」ことだったのかもしれませんが。
だとすれば、今ほど「大人とは何か？」が問われるべき時はないのではないのでしょうか。

KOTOBAOLOGY



テレビドラマのタイトルから 見えてくる「理想」と「憧れ」と「期待」、 そして、未来への「仮説」。

テレビドラマは、社会に「夢や理想」を提示し、「憧れや期待」をかたちにして見せてきました。そして、いまは数多くの「仮説」を見せてくれているのではないのでしょうか。
「家」らしくない場所に住む家族がいてもいいのでは？ 言い出せば、いざ戦うときは逃げてしまうヒーローもあり？ おっさんが若者キャラを演じるなら、子どもが“大人キャラ”を演じたらどうなるだろう？
かつてない自由なホームドラマ、ヒーローもの、青春ドラマがいたくさんあります。
あなたならどんな「仮説」を描きますか？

「ことば社会年表」で始めてみて下さい。

<http://timeline.kotobaology.jp/>